

# ミソジニー、ジャイノフィリア、ベルダーシュ

——仮説形成のための試論——

Misogyny, Gynophilia, Berdache—A Tentative View—

藤崎康彦

Yasuhiko FUJISAKI

## 要旨

北アメリカ先住民諸部族のベルダーシュについて、それぞれの集団毎の宇宙観における位置づけなど、価値観と社会構造の面から筆者はこれまで考察を重ねてきた。ベルダーシュについての通説は様々あるが、なぜベルダーシュというものがあるか、それも男のベルダーシュが基本であるのはなぜかについて、本論文では新たな観点から仮説の提示を試みた。それは人類に普遍的であるミソジニーのちょうど裏返し(同一物の裏面)であるジャイノフィリア(ガインフィリア)を手懸かりにするものである。女性羨望、女体嫉妬ともいべき現象は文化レベルでも個人レベルでも広く見られる。ベルダーシュをこのジャイノフィリアの観点からとらえ返すことで、新たな展望を得る可能性を検討した。

## 1 問題の所在

筆者はこれまで北アメリカ先住民の「ベルダーシュ」について、部族ごとに、神話や宇宙観なども含めてその社会・文化的意味を探る作業をいくつか行ってきた(藤崎2007他)。しかし、資料の古さはともかく、記述する側の偏見や心理的抵抗などによる、曖昧あるいは不正確な記録の断片などから、その社会の「ベルダーシュ」の意味を推測する作業は必ずしも容易なものではなかった。現在もその作業は続けているが、本稿では幾分視点を変えて、「特定のこの社会のベルダーシュ」ではなく、「ベルダーシュ」というものの普遍的な特徴や性質を(あるとすればであるが)理解するための枠組みを仮説的に構築する作業を行いたい。

その前に、これまでのアメリカ人類学のステレオタイプの発想を改めて確認しておきたい。その一つは「ベルダーシュ」個人の資質に焦点を当て、なぜその人が「ベルダーシュ」になったかと問うものである。これは基本的に平原インディアンがモデルになるが、そこでは男は戦士として、狩人として、勇猛でなければならぬと小さいときからしつけられる。戦士として武勇を実現しようとする勇気のない、精神的に弱い男が、男であることを回避する道筋(社会的に許容される存在様態)として「ベルダーシュ」を選ぶという理解が初期のアメリカ人類学では普通であった。

ここには、男であることをやめることはすなわち女になることだと

う、二項対立的な見方が明らかに前提になっている。そういうものである以上性的にも女性役割をとるのが当然とされて、「ベルダーシュ」はホモセクシュアルであると想定されることになる。これがもう一つのステレオタイプの見方である。

同性愛についていえば、ヨーロッパ人が「ベルダーシュ」を観察し記録に残した初期から男性的行為の存在に関心が向けられ、仄めかしや間接的な表現で記録されてきた。明示的にといより真つ向からそれに焦点を当てて論じたデヴロウ(1937)はむしろ例外である。彼はアメリカ先住民の各部族のような小さな集団において、明確に同性愛的傾向のある成員にも逸脱者としてではない社会的位置を与えること、かつ他の者が「ベルダーシュ」相手に一時的な性の冒険をすること、それ以上の問題を生じさせずに社会の健康が保たれること、の二つによって、「ベルダーシュ」はむしろ意義のある制度であると考えた(Devereux 1937)。

最近ではゲイなどの性的少数者研究の脈絡では「ベルダーシュ」は同性愛者であることを当然視しているようだ。「ベルダーシュ」は男のspiritと女のspirit両方を持つ存在であり、北アメリカ先住民の固有の文化であったとする。現在の先住民のゲイ(やレズビアン)たちは自分たちの土着の文化的伝統に連なるものとして、(白人のゲイやレズビアンとは異なる)自らのアイデンティティを形成し、「Two Spirit」と称している(例えばBrown 1997, Jacobs et al. 1997など)。

「Two Spirit」の考えは、やはり男女二項対立的な見方によっている。二つの性質を両方持つということ、男でもない、女でもない独自の存

在、独自のジェンダーであるということとは同じではない。「ベルダーシュ」は「第三のジェンダー」(Third Gender)であるとする立場とこの「Two Spirit」的考え方は必ずしも親和的ではないと思われる(例えば Herdt 1993 など)。

このような従来の説明では、「制度としてのベルダーシュ」と「ベルダーシュである個人あるいは人々」の性質の説明との区別が十分になされていないように思える。というより、どうしても「ベルダーシュ」である個人にのみ関心が向いているように思える点が納得のいかないところである。

個人が先か、社会が先か、というのは容易に決してみようのない問題だが、「ベルダーシュ」については概念的、理論的に区別をする努力が必要である。例えばナバホ族のように両性具有的な個人 (hermaphrodite) がいて、そういう人が本当の「ナドレ」(ナバホ族の「ベルダーシュ」)になるのだ、と社会的に認識されている場合がある。(そうでない人はそうと偽っている「ナドレ」とされることになる)。また、夢見などでその人が啓示を受けたから「ベルダーシュ」にならざるを得ないのだ、と考える社会もある。これらは何らかの特異な性質、あるいは経験をもつ(ある面「聖痕(ステイグマ)」をつけられた)個人がいて、それらの人に何らかの社会的役割あるいは位置づけを社会が与えるのだと考える立場である。いわば個人中心的な発想に近い。

これに対して、健全な社会の維持のためには必ず「ベルダーシュ」というものがいなければならないと考える立場もあり得る。この場合理論

的には、極端に言えばその人は誰であつても好い。特別な特徴が要請されることは必ずしも必要ではない。これは部族の繁栄(女性の多産性)に(呪術的に)必要である、象徴的・儀礼的な効果が「ベルダーシュ」が存在していることにはある、とする立場である。社会中心の言うべき見方に近いであろう。

筆者はこの立場を重要なものと考えるが、それは筆者自らの台湾でのシャーマニズム研究などがヒントになっている。台湾の村落の廟には、人々に神意を伝える媒体 (medium) としてのタンキー(童乩)が必ずいなければならない、とされている。何らかの理由で欠けると補充の方策がとられる。「ベルダーシュ」の場合も同様に部族ごとに何人かは必ずいたようだ。詳細は不明だが、ある家系ないし家族から出る、あるいは選ばれることになっている部族もあるようだ。そのような特定性はないにせよ「ベルダーシュ」を「切らさず」必ず誰か一人は部族集団(バンド)にいるのかごとくに感じられるのは、集団の圧力、集団の意志がまざり、ある個人がそれに感応するような現象と考えられるのではないかと思う。

これも筆者の沖繩におけるシャーマニズム研究の経験からヒントを得ている。沖繩では夢見がちというか、霊的なものを感じやすいと周囲が見なす少女などがあると、将来の「ユタ」(沖繩のシャーマン)として育ててゆくのではないかと、特別な目で見守っていることがある。霊に感応しやすい特別な「生まれの」人として扱い、いずれユタとして成巫すと期待するようだ。

「ベルダーシュ」の場合も幼いときから独特の資質を示して、女の子と交わって女の子の遊びをすることを好むとか、女の仕事に興味を持つとかのことが指摘されている例がある。親は将来「ベルダーシュ」になることはできたら避けたいとして、そのような傾向を抑制するようにしつたり注意したりするのだが、効果はなく、思春期に入る前の年頃にイニシエーションを行って、いわば部族公認の存在になるようである。そしてそれなりの役割を儀礼などで果たすことが多い。

つまり、「ベルダーシュ」は個人のレベルの問題ではなく、先ずもって社会的なレベルの現象として理解する必要があるというのが筆者の立場である。しかし最初に述べたようにこれまでは部族ごとに個別にその社会的な位置づけをみる方法をとってきた。それは必須のことであり今後も続けるつもりであるが、本稿では構造的に「ベルダーシュ」が生まれ、かつ社会的にも必要とされる意味、できたら必然性を考えることを目的にする。

そのためには「ベルダーシュ」そのものから少し離れ、一見全く関係のなさそうな現象、あるいは概念枠組みを参照してみる必要がある。それがミソジニーであり、ジャイノフィリアである。

## 2 ミソジニー

### 2-1 定義

ミソジニー (misogyny) はフェミニズム、女性学の脈絡で問題にされ

てきた。女嫌いとか女性嫌悪とか女性蔑視とかと訳されているが、本稿ではミソジニーと表記する。人類学者であるギルモアの浩瀚な、人類学の分野ではほとんど唯一の研究書である *Misogyny* (2001) では、それは「男性の病気 (male malady)」とされている。男たちは女を嫌い蔑視してはいるが、それは私たちの神秘的な魅力に惹かれておることの裏返しであり、男にとつての異性である母に育てられることからくる葛藤と混乱——そういうあり方を神経症の一種類とギルモアは、比喩的な意味においてであろうが、みている——の生み出したものである。したがってこれは、程度はともあれ、ほとんど人類として普遍的な現象と考えなければならぬ。

### 2-1 ミソジニーと男性優越主義との違い、その他の概念的区別

女性学などではミソジニーが女性差別につながるとして批判するが、社会的な男性優越主義 (male chauvinism、ほぼ狂信的な「男尊女卑思想」としてよい) とは区別すべきだとギルモアは考えている。ギルモアの立場ではミソジニーは単なる男性の政治的な優越性 (の思い込み) と同じではない。後者は意味論的にはここでいう男性優越主義としてミソジニーとは区別されるだろう。さらに「家父長制的な伝統主義」と「文化的なミソジニー」を区別しておく方がわかりやすいだろう。前者は政治的な信念のより広い配置の中に、女性達の妥当な居場所と社会的地位を定義することである。後者は社会構造の中の女性達の地位に関わりなく、病的嫌悪や恐怖や幻想によって育まれる、とりわけ情緒的な感受性

である。男性優越主義のイデオロギーは政治的な信条 (dogma、独断的見解) であり、両性の間の市民的権利と権力の釣り合いについての決定に関わる。ミソジニーは、政治的な波及効果はもつが、本質的には思想ではなく激しい感情に基づく情緒的なあるいは心理的な現象である。

ミソジニーは腹の底からの非理性的な心情・態度であるので、それは女性達を排撃し害すること以外の、何らの公式的な政治プログラムや立場を持たない。ミソジニスト (女性嫌悪主義者) は「本質主義者 (essentialist)」である。女性達の中に紋切り型の「本質」—— (女性としての) 個人的な差など関係ないような、女である以上必ず持つはずの、根本的で不変のそして邪悪な本性——があると断定するのである。

ギルモアはさらに、非制度的な種類の、(社会的に) 是認されていない反女性的な (女性の利益や存在を侵害する) 行為もミソジニーの (人類学的) 研究視野には含めない。従って犯罪であるレイプ、性的虐待、ドメスティック・バイオレンスなどは彼の研究対象から除外する。公的な文化の中で制度として一般的に受容された形態を取る集団的行動にギルモアは関心を持つ。つまり、文化的に構成された投影 (projection) メカニズムの例としての、公的な価値システムの部分としての制度である、規範的な構造に埋め込まれた、全てのあるいはほとんどの男性達に共有されている、女性嫌悪に関心の対象を限ろうとする。いわば集合表象としてのミソジニーである。

ただしこの区別が現実的に維持できるのか、疑問ではある。例えばレイプやドメスティック・バイオレンスなどはミソジニー的心性を前提に

しなければ生じはしないとする立場は (フェミニストならずとも) あるだろう。恐らくこの部分のギルモアの考え方には様々な批判があり得るだろう。この点は、後で日本のミソジニーに関連して筆者も手短かに再検討する。

## 2-2 ミソジニーの顕著な地域とミソジニーの種類

ギルモアの意味でのミソジニーは、地域で見た場合、確かに激しいところとあまり目立たないところとがあるようである。ギルモアの指摘しているように、最悪の (ミソジニーのもっとも激しい) 地域はニューギニア高地とアマゾン (アマゾン川流域の熱帯雨林地帯とその諸民族) という地理的にかき離れた、かつ文化的にも関連は想定できない二つの文化である。しかしそのミソジニーの内容は驚くほど共通性がある。ミソジニーの表現としてはギルモアの分類を借りれば「身体的なミソジニー」と「道徳的なミソジニー」の二つを区別できる。前者は女性の身体とその生理機能に関係したものである。女性の月経や出産時の血に対するものから、特に膣とその分泌物に対するものまで、穢れの感覚や嫌悪、恐怖の感情がみられる。性的存在としての女性がそれらの根源だから、性行為もこの地域の男たちにとってはきわめて危険な、しかし快樂も得るのでアンビバレント (両価感情的) なものとなる。

性行為の危険についての観念は二重である。男にとって精液は生命力、活力の本質と観念されているから、それを失うことは身体の衰弱と究極的には死を意味する。性交は女が男から精を奪う行為であり、女はます

ます活力に満ちるが、男は「枯渴」する。と同時に女は邪悪な影響あるいは物質を性交あるいはペニスを通じて男に「感染」させる。この貴重なもの「枯渴」と邪悪なもの「感染」が女性との接触によって男に生ずるが故に、汚れたもの、邪悪なもの、危険なものとして男たちは女たちを（文字通り）遠ざけるのである。ニューギニア高地民の多くの部族は、女達から離れ、男たちだけで大きな「男の家（men's house）」で集団的に暮らしている。母親の元にいる男の子も可能な限り早く引き離して、「男の家」に連れてくる。これは（男の子ですら）女性の影響からできるだけ離れていなければならないという強迫観念的な思考からである。

ニューギニアの高地民が人類学で注目された（注目されている）理由の一つは、「制度化された同性愛（institutionalized homosexuality）」と研究者の間でいわれているものが報告されたからである。これは先の精液についての観念と男女の違いの観念に関わりがある。女性は月経の出血などを通じて老廃物や汚れを除去することができるので、それ自身で（定期的に）生命力を更新する存在である。それであるが故に男よりも長生きで、健康で、活力がある。男はそれ自身では精力をもった大人になることはできず、すでに大人になったものが精を幼いものに与えること、もしくは成長できない。そのために、若者などが少年たちに精液を与える。（と同時に母乳を通じて子供に与えられた女の悪い影響を体内からできただけ速やかに排除、浄化する意味もある。）つまりオーラルセックスやアナルセックスにおいて受動的な立場に少年が置かれ、年長の若者など

が能動的な、射精する立場になるのである。精液を（あたかも母乳の代わりに）与えられて、男の子は健康に強く育つとされる。

「道徳的なミソジニー」は、男が構築した秩序を破壊したり、男が道徳的精神的な高みを目指そうとするのを邪魔したりする存在として女を貶めることである。ニューギニアの高地民の場合、男だけの秘密結社を作り、その中で様々な秘儀的知識や儀礼を伝える。それを女が見たり、儀礼の道具に触れたりすると厳しい制裁（輪姦や場合によっては死）によって罰せられる。つまり男たちは何らかの価値のあるものを作り出そうとするのに対し、それを邪魔し、破壊する、あるいは墮落させる存在として女を憎み嫌悪する現象である。

これはなにもニューギニアやアマゾンニアの「未開社会」に限ったことではなく、古くからの文明やその大きな宗教の場合でも事情は同じである。修行に打ち込む男たちを誘惑して墮落させるのは、魅力的なそれ故に邪悪なものと感じられる女たちであるとされている。また社会のあらゆる面で「秩序」を作り出す男に対して、女は様々な企みを仕掛けてそれを無に帰させる。多くの社会で、男対女の対立は文化と自然の対立に、比喩的に等置されることを人類学は明らかにしているが（アードナー他1987）、「道徳的なミソジニー」とはつまり男対女の対立を秩序対混乱の対立に等置し置き換えたものといえることができる。

しかしこれまでの説明ですでに明らかのように、これらの女性嫌悪の感情はアンビバレントなものなのである。男は恐れつつも女に性的に惹かれてくる。本当は女なしに男の子を得ることができれば好いと思っ

いるが、女に依存することなしに自分たち男社会の成員は補充できない。<sup>(2)</sup> だからこそ男が改めて男を生み出す儀礼を行う必然性がある。しかしそれでもその儀礼は女性の生理的プロセスを模倣せざるを得ない。いずれにせよ（自分にとって害のある）性行為を行わなければならない。そしてこれがギルモアのいう「ジャイノフィリア」につながる。

しかし、それを扱う前に、ミソジニーについて日本の事情を検討し、併せて議論に必要な補助的な概念を導入しておきたい。

### 3 日本のミソジニー

日本ではケガレ（民俗学の用語なのでカタカナで表記する）の一つとして、月経や出産時の血が認識されている。（周知のごとくもう一つのケガレは「死」である。）当然月経や出産を経験する女性自身がケガレをかぶる、あるいはその源であるとして認識される。ところが、蒲生正男（1978）は同じ日本でも地域によってこのケガレに対する態度が違うのではないかと指摘した。蒲生は産屋とか他屋とかといわれる特別な小屋を手がかりに説を展開した。月経の時や出産の時に、集落の外れなどに建てた別の小屋に移り、家族と火（竈）を別にして過ごす慣習は西日本などに広く見られる。これに対して東日本では余り見られない。月経や出産の時のみケガレがかかっているから特別に忌み籠もりする、とするのであれば、それはそういう「状況」の時だけ特別なのであり、日常生活から一時的に身を引いて、慎めばよいとする論理であると想定できる。これ

に対して、女性はその存在自体ケガレを持っているものなので、社会的にも男性より劣位にあつて当然であると考えたとしたら、日常生活全般における差別は存在しても、特に月経や出産の時のみ特別なことをする論理は成り立たない。価値観として女性劣位が社会にあると考えることができる。

これらの態度の違いを蒲生は「状況の論理」と「価値の論理」として区別し、類型化の可能性を示唆した。日本の民族学や民俗学で、岡正男の影響を受けた、日本の基層的な文化の地域類型論に関心が向けられていた時期があり、蒲生の説もその脈絡で発想されたと思われる。しかし、これを筆者は地域類型論ではなく、ミソジニーの二つのタイプとして拡張して適用できないか考えてみたい。

ここで、ミソジニーの表現に影響する可能性のある、対立的な女性観を理念的にモデル化して示すと、

- (1) モデルA…女性そのものを異質視して差別する感覚。日本的なケガレについていえば女性の「存在」そのものがケガレしていると  
思考。（蒲生の「価値の論理」）

- (2) モデルB…女性のケガレは一時的なある「状態」とする思考。特別のときだけケガレをかぶるので、そのときのみ「忌み籠もり」すればよいとする態度。（同じく「状況の論理」）

をたてることができる。蒲生は農村や漁村などの生産者の生活を基本的に考えているが、階級あるいは身分の差も考えることができる。封建時代の武家の生活などが典型であろうが男尊女卑の考え方の強い身分があ

る。先に述べたようにギルモアの立場では単なる男尊女卑の思想はミンジニーとは異なるとされる。しかし、例えば（男尊女卑で名高い）薩摩の武家社会などでの、女は男の枕元を通ってはならないとか、ましてやたとえ母でも男の子を跨いだりしてはならないという決まりなどは、ニーギニアのミンジニーを連想させる。神聖な頭部や、子供でも男である以上その上に、女性の性的な下半身を近づけてはならないとの感覚があるが故の禁忌であろう。また風呂にしても女性たちは常に最後に入るというのも、ギルモアのいう「身体的ミンジニー」を想定しなければ理解できない。つまりこの場合は上記「モデルA」で理解できるので、ミンジニーの一つの現れと考えることができる。

その他にも特に宗教的儀礼などに関したところに類似の現象を見ることが出来る。仏教も「性差別」しているといわれるが、ギルモアのいうように「道徳的なミンジニー」であろうと思われる。男の修行者が色香に迷って精進の邪魔になるという恐れが影響しているのであろう。山岳宗教でも「女人禁制」がある。相撲の土俵には女は上がってはならないことを批判するフェミニストに対し、なぜ女は土俵に上がってはならないかを擁護した論もある。いずれにしてもただの男尊女卑ではなく、背後にミンジニー的な感覚を想定できるだろう。

現実の現象を二つのモデルでこのように截然と区別できるものではないことは確かであるが、またギルモアのように男尊女卑とミンジニーについても（概念的にはともかく）現実にはなかなか区別しにくいのではないかと思われる。

このモデルについては、まとめに当たる5で改めてベルダーシュのあり方に関係させて考えてみたい。

#### 4 ジャイノフィリア

ミンジニーの対概念、あるいは関連概念がジャイノフィリアである。ギルモアの著作の一章を占めるに過ぎないが、ベルダーシュを考えるのに示唆するところの多い概念であるので、検討したい。

##### 4-1 ギルモアのジャイノフィリアの定義

ジャイノフィリア (gynophilia)、カタカナに写すとしたら「ガイノフィリア」となる発音もある。また英語の表記も gynephilia とするものもある) はミンジニー同様定義のしにくい概念である。ここではギルモアの説明を少し長いが引用したい (Gilmore 2001:182)。曖昧なところは言葉を補って訳してある。傍線部強調は筆者のものである。また引用文中の二重山カッコ《》は、原文中の ( ) に相当する。

「女」には、男の高貴な（しかし非現実的な）理想を妨げて、彼の高い（空疎な）目的を破壊し、精神的な完成への彼の探究を惑わせて汚す、神秘的な（危険な）力がある。

しかし彼女は決して偶然ではなく、彼に彼の世俗の生活の最も大きな楽しさを提供してくれる。これらの楽しみは、性の（緊張）

解放だけでなく、女性だけが（ほとんどの社会組織に基づいて）提供することができる、生命を維持する他の満足である。つまり食物、優しさ、(子供の) 養育、および (男の) 後継者などを提供してくれることである。女達にたいして一番遺憾に思い不信を抱く男達が、女達を賞賛し、求め(欲望し)、彼女らが必要とする(まさに) 同じ男達だというのは驚くべきことではない。最も芝居じみて強烈な、女性にへつらう儀式が、女性バッシングの最も(程度が) ひどく、卑しい事例に対して責任のある(その) 同じ社会に生じているのである。

(ミソジニーと) 同じくらい強力で、同じように遍在している、男の苦痛に満ちた精神のコインのこの反対側を《ギリシャ語の語根を使用する習慣に従って》「*gynophilia*」と呼ぶことができるかもしれない——他の受容可能な用語がない状態でやむを得ず持ち出された、明らかに奇妙な新語であるが。ミソジニーと同様に、*gynophilia* は一種の男性の神経症である。というのは、同じ未解決の葛藤から生じるからである。それ (*gynophilia*) は、肉体的および霊的な両方の現れを持っていて、通常の反復的な諸儀式および創意に富んだ民間伝承を伴っている。それはいわば、並行的な宇宙におけるミソジニー的な中傷と並んで存在している(女性に対する) 過大評価である。

#### 4-2 ジャイノフィリアの例

##### 4-2-1 月経の模倣

ギルモアが挙げているジャイノフィリアの例は、一つは人類学で「女性の月経」とか「模倣の月経」と呼ばれている現象である。これは男達が定期的に身体はどこから血を流出させて、それを女の月経になぞらえることである。ギルモアによればこれはイニシエーションの一部として少年たちに行われることもある。大人たちが少年たちを集め、鼻孔(鼻中隔)に鋭い棒状のもので傷をつけ出血させる(同書:85)。これは少女の初経(初潮)に相当するものである。デヴロウが報告した北アメリカ先住民のモハーベ族でも鼻中隔を破って出血させることは、以前に筆者も男子イニシエーションとの関係で論じた(藤崎 2009b)。すぐ後に述べる Wegeo では舌に切れ込みを入れて出血させ同じ意味を持たせているようだ。

この「瀉血」はイニシエーションの一部として儀式的に行われるものだけではなく、いわば男達の健康法として個別にかつ日常的に行われている例もある。ギルモアも指摘しているが、ホグビン (1970) の報告した Wegeo というメラネシアの島(ニューギニア島のパプアニューギニア側の、北東海岸沖のビスマーク海上で、ニューギニア本島にきわめて近い位置にある)では、女の月経は(勿論男達は嫌悪しているのだが)彼女等を強くする呪術的物質であると同時に身体に蓄積された穢れを浄化するものであると信じている。男には月経がなく、女が有するこのよう

な利点を享受できないので、必要に応じて自らのペニスを傷つけ出血させることで、月経を演じ、健康を回復するのである。Weggoも（ニューギニア本島と同じく）徹底して男女別々の社会生活を、いわば宗教的教義ともいべき決まりとしていて、その限りにおいて男女とも病気や災難から免れていられると信じている。しかし性行為はその決まりを逸脱しなければならぬ場面の一つで、男女ともに危険の伴う行為と認識されている。その結果彼等はどういう風に考え行動するか、これも少し長いがホグビンを引用する（Hogbin 1970:87-88）。同じく脈絡を理解しやすいように括弧内に言葉を補った。

その（性行為の）結果は、全成員が永久に衰弱し、病気や災難に遭いやすくなることである。男性は女性と触れ合ったが故に、女性も男性と触れ合ったが故にそうなるのである。女性たちは、しかしながら、月経という通常の生理学的過程によって定期的に感染から免れているので、男より恵まれている。（外部から感染する）異質なものは月経時に自然に流れ出してゆくからである。一方男性たちは、このような定期的な（害毒の）除去を確実に行うために積極的な方策をとらなければならない。従って、年長者達は思春期にさしかかった少年を選んで彼の舌に切れ込みを入れる役目をする。それによって子供の時に（女達のもとに在ること）吸収した影響を彼らから取り除くのである。さらに後になって、少年が成年に達したら、総ての男達はペニスに切り傷をつくっておびただしく出血させること

を實踐しなければならない。この後者の手術は *sava* として知られているのだが、月経期間中の女達に適用される言葉である *baras* が数日間はこの男にも同じように用いられる。それはすなわち、女性達は彼女らの清浄さを自然の月経で回復するのであるが、男達は人工的な月経によって彼等の清浄さを取り戻すということである。

月経を真似て意図的に出血を生じさせる例の、人類学で同じように有名なものはオーストラリア・アボリジニが行う「下部切開（subincision）」である。これは尿道切開という場合もあることから分かるように、ペニスの下部に鋭いもので縦に尿道に至るまで深く切れ目を入れることである。これは上記 Weggo の男達がペニス（主に亀頭部）を傷つけるのとは異なり、永久的な変化をペニスの形状に生じさせる。人類学では割礼と同じようにペニスに施される身体変工の一つとして理解することもできるが、意味は異なる。この下部切開の出血は女性の月経と同じように理解されているし、ペニス下部に開いた縦の切れ目は膣に擬えられている。ただ筆者がここで言及した下部切開については、ジャイノフィリアと理解されるべき諸現象の例としては、ギルモアは擬婉（*couvade*）の中で論じている。月経と妊娠は切り離せない現象であるので、分類は難しいかもしれない。ある現象の意味を深入りして考えるとどこまでも思考を拡大してゆかなければならなくなる恐れがある。また、ギルモアはニューギニアだけではなく、平行した現象としてアマゾニアの例も論じている。そこまで紹介し議論する紙幅の余裕はないので、以下はギルモア

の挙げる項目だけを簡単にみてゆきたい。

#### 4-2-2 擬婉

人類学で *covade* といわれている現象で、妻が妊娠すると夫も妊婦としての様々なタブーに服する慣習は世界各地で見られる。場合によると夫も出産の真似をするようなこともある。これらをギルモアは女性羨望の意味を持つものとして、「子宮羨望」、「出産羨望」の表現であるというベッテルハイム (1971) の説も引いて、ニューギニアやアマゾニアの例を論じている。

日本の民俗学でも「男の悪阻」とか「クセヤミ」とかいう現象が知られている。ギルモアが引く「未開社会」の例ほど大げさではないが、妻が妊娠すると夫まで何かと具合が悪くなり、出産が終わると消えるといわれる現象は日本各地でも様々の伝承がある。

#### 4-2-3 男性の妊娠

擬婉は妊娠の兆候を模倣するのであるが、男性の妊娠 (male pregnancy) は男性も妊娠しようという民俗的、神話学的、あるいは個人的信憑に基づく様々な現象を指す。例えば、日本語にも訳されているザッペーリ (1995) の『妊娠した男』には、イブがアダムの肋骨から作られたという旧約聖書の話がキリスト教世界で変化して、アダムの脇腹からイブが生まれてくる (アダムがイブを出産する) 図像が多く描かれてきたことが具体的に示されている。そこからヨーロッパにおいて男が

(特に僧侶が) 妊娠した話がフォークロア的に流布したことなどから、教会と民衆、男と女、都市と農村など様々な対立軸での権力の対立を読み解いている。

北アメリカ先住民のフォークロア研究で有名なアラン・ダンデスが『Earth-diver』という論文 (1962) で地下 (水底) に潜って泥の一片を口にし、地上に再び浮上する文化英雄 (多くはカラスやコヨーテの姿をとっている) が、地下あるいは水中で口にしたものを肛門から排泄する。その行為が世界の総ての生き物を生み出すという神話的な話が世界にあることを示した。「ダンデスは、『神話詩学的な男性』のこの共通のテーマを普遍的な子宮あるいは妊娠羨望の例とみなす」とギルモアは指摘している (Gilmore 2001:195)。

また同性愛の男性が想像妊娠をした例もバレット (1999) が報告している。禁煙をするために催眠暗示を受けていて、『どんな人間になりたいか』想像するように「言われたとき「妊娠した女性のイメージがひょいとうかん」で、催眠下で「その人間になれるという暗示を受けた」ためにお腹や乳首が膨らんできたのだ (バレット 1999:122)。悪阻も生じ、乳首から液体が分泌され腹部内に、心臓の鼓動、のようなまで感じようになった (同書、同箇所)。

このように単性生殖的に、あるいは男の自分が女性として受精して、男は子供を産むことができる、あるいは何かを生み出すことができるという信憑は、時空を超越して普遍的に存在するし、それは女性羨望の一つとして理解できるのである。

## 4-2-4 服装倒錯および女性を演じること

カーニバルやその他の祭りなどで、あるいは何らかの儀礼の中で反対の性の服装をすることもほとんど普遍的な現象であり、その場合は男が女の服装をする（女を装う）ことが圧倒的に多い。ギルモアは主として制度的、あるいは集団的な現象を取り上げているが、筆者はむしろ個別の個人のレベルでも女装を好む人は少なくないことに関心を持つ。これについては以下の4-3で改めて取り上げたい。

## 4-2-5 神聖な姉妹達

ミソジニーが最も激しくなり得る社会構造は、小規模の集団毎に分離している社会で、父系出自の親族構造を持ち、夫方居住の婚姻様式のあるところであるとギルモアは考えている。この親族構造においては、妻は夫の出自集団にとっては全くのよそ者（潜在的には敵の一員）であり、父方親族（特に兄弟達）で団結している居住地に婚入してくる妻は、むしろ男達の団結にひびを入れる者として明確に敵視される。あらゆる意味で邪悪な存在に妻達はなり得るのである。これに対して、同じ出自集団に属する姉妹達は、男にとって妻達とは全く異なる意味を持つことがあり得る。姉妹を崇め賞賛するのである。ギルモアは例としてニューギニアの例も挙げているが、ネパールのヒンズー教徒の村落の事例も挙げている。反転した女性イメージとしての女性賛美は、ミソジニーのもう一つの面であるとギルモアは考えているのである。ミソジニーとジャイ

ノフィリアは同じ盾の両面であるとの主張のよい例となることは納得できる。

我々日本人にとって、この女性賛美というより姉妹賛美はわかりやすい。沖繩の「オナリガミ」信仰を思い合わせればよいからだ。

ギルモアはこのほかにもジャイノフィリアの例として、月経恐怖と反対の、月経をよきものとみる見方も世界各地から挙げているが、もう女性願望、女性羨望としてのジャイノフィリアの意味については十分理解できたと思われる。

## 4-3 ジャイノフィリアのもう一つの意味

ジャイノフィリアについてのギルモアの説明的定義を最前引用した際、彼は「他の受容可能な用語がない状態でやむを得ず持ち出された、明らかに奇妙な新語である（傍線部強調は筆者）」と述べていた。確かに人類学では筆者はギルモア以前には聞いたことがない。しかし、他の分野を含めて言葉自体もなかったのだろうかと思いついてみた。グーグルで「gynophilia」を検索すると「gynophobia」と勝手に認識して（恐らくミススペリングと判断して）その項目が揭示される。これでは「ミソジニー」と意味的に同じである。ヤフーで検索すると数件ヒットする。それが判明したことは「androphilia」のほうから、あるいは「androphilia and gynophilia」として検索すると、グーグルでも出てくることだ。

グーグル・ブックスで gynophilia で検索すると、第一番目にギルモアの *Misogyny* が出てくるが、それ以外でこの言葉が含まれている本は、は

ほとんどセクソロジーや同性愛や性の心理学や精神分析関係、及びフェミニズム（文芸）評論関係と思われるものであった。念のために心理学関係で最新の用例を見ておきたいと思いいアメリカの学位論文を代理店に依頼し UMI (University Microfilms international) で表題だけではなく要約までを含めた検索をしてみたところ、一件だけヒットした。それが Bickford 2003 である。ギルモアの用法と比較対照する為にも、またこれからの筆者の立論の為にも参照しておくのは適切だろうと思いい、簡単に筆者なりの理解で紹介したい。

ビックフォードは同性愛の、特に性指向性 (sexual orientation) の心理学的研究をしているのだが、従来のホモセクシユアルやヘテロセクシユアルでは分析概念として現象を記述するのに適さないという。例えばホモセクシユアルは、性的な欲望を抱く主体と、その欲望を向けられる対象のセックスの二つの組み合わせで定義される概念である。これは変数が二つある概念を扱うことになり、対象の多様性をうまく記述できない。殊にジェンダー・アイデンティティの概念が広く受容され、それに伴い性同一性障害 (Gender Identity Disorder 普通 GID と略記する) も認知されていて、また性別再指定手術 (Sex Reassignment Surgery) いわゆる性転換手術、通例 SRS と略記する) が普通に行なわれるようになった現代ではそうである。トランスセックス (SRS を受けた GID)、例えば MTF (Male To Female) 生まれながらの身体は男性だが、手術によって外性器などを女性化した人、あるいはそれを望んでいる人、逆は FTM) が男性を性的対象として欲望したとして、それはヘテロセクシユ

アルなのであるか、ホモセクシユアルなのであるか、研究者によって見解が異なるようでは議論が進まない。用語が分析を妨げることになりかねないのである。

従って、先ず欲望の対象と欲望する主体とを分離し、記述する方法が必要になる。アンドロフィリアは単にある人の性的欲望の対象が男である (男に惹かれている) こと (attracted to men) だけを示す概念とする。ジャイノフィリアはその逆で性的に女に惹かれていること (attracted to women) でありそれ以上でも以下でもない。

ビックフォードの研究自体は、この様な単純化された尺度をいくつか組み合わせ、それぞれを当事者に自己評定してもらい性指向性の研究に客観性を持たせること、特にゲイやレズビアンの人たちの社会的問題を考える際に有効なツールにしたいと意図したもののようである。

筆者はギルモアの、ミソジニーと表裏一体の豊かな含みのあるジャイノフィリアの概念を尊重するが、ビックフォードの単純化された概念も面白いヒントを与えてくれるように感じる。ギルモアの二つの用語の中にギリシャ語の語根として含まれている「女」は明らかに自然的存在の女性を意味している。自然的存在の男性が羨望したり嫌悪したりする、肉体を備えた生身の、まさに女性そのものである女である。ミソジニーに見られる、「女というものは……」的な類別的、本質主義的思考はこのような女性しか含んでいない。ところが、筆者が考察の対象にするベルダーシュなどは、そういう、いわば素直な女性性、男性性が何らかの形で文化的修飾を受けたり、変容を蒙ったりしている存在であると考えざ

るを得ない。その時、要素に分けた単純な記述概念の方がものを考えやすくしてくれる面もあるのではないかという気がする。

別な表現をすると、ギルモアもビックフォードもジャイノフィリアについては、「女に惹かれている、魅せられている」ことを共通に意味の核としている。しかし、問題は「女」とはなにか、「魅せられる」とはどういうことか、魅せられたり惹かれたりしているのは誰か、などに関して、意味が多重的に生まれてくるように感じられることである。例えば、この共通の核の外に暗黙の内に想定されている、「女に惹かれていたり、魅せられたりしている」主体は誰かとなると、ギルモアは自明で自然的な男性であり（だからこそ *male naldy* という表現がなされるのだが）ビックフォードはそれこそ誰か分らない。

この様なことから、ギルモアの概念を背景にしつつ、多様な場合を視野に入れることのできるビックフォードの概念も取り入れて、本来のベルダーシユの議論に進みたい。しかしその前に、ジャイノフィリアとベルダーシユ、ギルモア的概念とビックフォードの概念の媒介項になると思われる筆者の経験を述べたい。

#### 4-4 ある観察

自身がトランスジェンダーである、GIDの研究者でもあり活動家でもある人が、GIDの（当事者およびその家族の）ケアのためのワークショップを開催したことがある。そこで出会ったある人（当事者）は、理知的な顔立ちの大変魅力的な「女性」に見えた。MTFやFTMなどのトラ

ンスジェンダー、トランスセクシュアルの「当事者」とその家族、彼らを支援する専門家たち、それと私のような研究者のみが出席するこういう場でなく、普通の日常的な場面においてであつたら、二十代半ばかそれより少し後位のすてきな美人としか私には思われなかつたらう。

そのときの「彼女」の発言は印象に残っている。当時はその持つ意味はよく分からなかつたが、今このような視点で捉え直してみると意味深い。その発言の趣旨は、表現はこの通りであつたかは自信がないが、大筋では誤りはないと思う。

「彼女」は鏡に向かって、きっちりメイクして、もちろん（女性の）服装も整えて、自分の姿を点検する。（普通の）女よりもずっときれいで魅力的と思つて、「やったー！」と達成感に高揚する。しかし、その後すぐに、「でも（本当は）女じゃないんだよね」と思つて（我に返つて？）どつと落ち込む、という様なことだつた。「彼女」はそのときにはSRSはまだ受けていないので、トランスジェンダー、トランスベスタイトであつたのだらう。ホルモン療法を受けていること、いずれタイ国でSRSを受けたかと思つていることなどを話してくれた。

また、性転換して「女性」になつたとして、一番不安、心配なことは自分を女性として性的に受容してくれる男性が見つかるだらうかということだ、とも話してくれた。つまり女性としての性生活が（今後の）一番の不安ということである様だ。

GIDは、小さいときから自分の「ジェンダー意識」と「身体の性」の食い違いに苦しんできた人たち、と理解されている。心と体の間の違和

感があまりに強いので、それは認識を変えることで解消できるようなものではなく、身体を変えることでしか当人の悩みは解決することができない「病気」だとされている。それ故に医療の対象になり、根本的な治療としては、いわゆる「性転換手術」を行うしかないとされてきた。

この人が、小さいときから男の身体であることに違和感（異和感）を持ち、自分は女だと思っていたのだろうか、つまり今述べたようなGIDの典型的な（あるいは定型的な、ステレオタイプの）経験をしている人なのだろうか、本当のところは私には分からない。しかし、同じくこのワークショップでの「彼女」の発言で、(GIDではなく)「普通」の人は、普段の生活で自分が男だとか女だとか意識することなどはほとんど無いはずなのだと言っていた。これは私もそう感じていて、「性同一性」などは、たとえば自分が男であることなどに当たり前で、普段は意識には上らない。そういう概念すら学問で学んだもので、日常的に意識しながら生きている感覚ではない。したがって、常にその違和感に苛まれているような人がいるということは、頭では理解できても、実感はしにくいことだ。先の発言で「彼女」には、私も含めた大多数の人たちのような気楽さはない、無頓着さは持てないのだと言っていたのかもしれない。

しかしながら次のように言うこともできるのではないかという気がする。「彼女」は男の身体を持っていることを「彼女」の現在の存在についての本質的な規定性と感じているのではないかということだ。そうであるからこそ「自分は女ではない」と思って「落ち込む」のであろう。GID

の人たちのいう「違和感（異和感）」はよくわからないが、「彼女」は「私は女だ」という気持ちの基本にして、自分の男としての身体を嫌悪しているのではないように（今になって）私は感じる。むしろ（男であることとの認識から出発して）「女性」に対する憧れ、羨望に囚われていたのではないかと思う。

もう一人、こういう脈絡で初めて理解できるかもしれない、別の場面で出会ったことのある人のことを思い出す。その人は若い男性で、仕事や言葉遣いなどに表れる女性的な雰囲気は感じられるが、(いくつかの装身具は別にして)女性の服を着ていたわけではない。本人も自覚しているのだが、その時点では同性愛の指向性が明確にあり、実際に男性を求めて、そういう出会いを得やすいしかるべきところに行き、機会があれば受動的な（つまり挿入される立場の）性行為を行っていた。つまり現象的には同性愛者として理解されるようなあり方が顕在化していた。

その人の話を聞いていて印象深かったのは「男の人に女として愛されたい」という願望（欲望）があることだった。セックスは男の人に愛されるための一つのあり方であって、それ自体の快感追求が目的というようには私には感じられなかった。確かに男の人が好きなのであるが、それは（女として）その人の身の回りの世話をしたりして「尽くして」あげたい、そういうことをすることができるようになりたいというのがその人の切望していることであるようだった。極端に言えば、「男の人に尽くして愛されている自分（そして男の人に優しく抱かれている自分）」のイメージに憧れている、あるいはそれを欲望しているといっても好いと

感じる。そのためには身体的存在として女性になり、(同性愛の男としてではなく)女性として男性に愛してもらいたいと願うことまではほんの僅かの距離しかないだろう。

ここで上げた二人の若い男性がGIDと診断されるのかどうかは医師ではない私には判断はつかないし、本論の論理構成にも影響しない。私が指摘したいことは、二人とも女性である自分のイメージ(の実現)を欲望していることである。彼らは女性であることに強い羨望を抱いているのであると思う。女の姿(化粧や服装やその下に隠れている性的な部分)、女としての行動(仕事や性役割)、そして女としての社会的受容、特に(女であった場合には)異性である男性からの(性的な)受容に強い欲望を抱いていることこそが、ここでの問題である。

#### 4-5 ジャイノフィリア概念の拡張

上記の観察事例は、「女に惹かれている、魅せられている」ことを関心の核として持っている点では、これまで見てきた二種類のジャイノフィリアと同じであるように見えるが、性質の違うことが感じられる。喩えて言えば、同じ羨望するにしてもあくまで男の側に留まって、対岸にいる女を羨んでいるのがギルモアのジャイノフィリアであるといえよう。ミソジニーの他面であるだけに、男同士の連帯と女に対する蔑視は捨てる気は恐らく無い。例えば女の呪術的な力を都合のよいところだけ我が物にしたいがために、様々な儀礼などを行っているかのように見える。これに対してここで見た事例は、憧れる余り男の側から彼岸である女の

側に移ろうとしているかのようだ。

このように、「女である私」を希求する心理的態度に類似した現象については別の用語もあるらしい。それは「autogynephilia」で、意味は、「自分が女であると思うことで性的に興奮する男の傾向性」<sup>3)</sup>とされている。しかしながらウェブサイトで調べてみる限り、これはある特定の研究者が提唱した概念で、広く受け入れられているわけではなく、議論も多々あるようである。特に私には「性的に興奮する (be sexually aroused)」ことがこの場合どのようなことを意味するのか分からないので、前述の事例に適用してよいか判断はつかない。従って、慎重な研究態度を維持するためには新語使用 (neologism) は避け、ジャイノフィリアに二面性があることを区別しておくだけに留めたい。

しかし、二面性を弁別する意義については述べておく必要がある。ビックフォード的な概念を用いるなら、上記の事例の二人は性指向が男性であるからアンドロフィリア (androphilia) としか認識されない。ギルモアのな見方なら、それぞれ個人特異的な現れをしているが、やはり社会文化的な背景を持つジャイノフィリアに含めることができるように思う。つまり、ここで先ほどの蒲生のモデルが意味を持つてくるように感じるのだが、男女の隔壁の堅いところ、男女はカテゴリーとして異質な、全くの対立的な存在と考えているところでは、ギルモアが最悪のミソジニストとしたニューギニアやアマゾニアの諸民族のように儀礼やその他の場面で女性羨望はあっても、おそらくここで見た事例のような人は出てこないだろう。それに対して、蒲生の説の紹介で「モデルB」とした

ような社会では男女の隔たりはそう強固なあるいは深遠なものではないように感じる。そういうところでは、隔たりを超えることは余り抵抗のないものになり得るのではないかと考えている。

勿論これはあくまでもまだ思いつきに過ぎないことかもしれない。また、文化全体によっても態度は異なるだろうことも考えに入れなければならない。例えば現代社会で考えても、欧米に比べてまだしも日本文化の方が女装に寛容であったり(三橋 2008)、「ニューハーフ」などもむしろもてはやされたりしているかのように感じる。そのようなことも含めてジャイノフィリアの観点からベルダーシュを再考してみたい。

## 5、ベルダーシュ

ギルモアは社会構造によってミソジニーの激しさは異なることを示唆している。先に述べたように小さな集団で、父系出自の親族構造を持ち、夫方居住の婚姻様式のある社会では、男達は集団の存続に不可欠である妻に全面的に依存せねばならないにもかかわらず、妻は徹底的なよそ者であるので、アンビバレントな感情に引き裂かれ、ミソジニーは厳しいものになり得る。と同時にジャイノフィリア的な、特に生殖力の賛美とそれを男のものにしたいという欲望も強いものがある。

北アメリカ先住民では、部族毎に父系出自か母系出自かは確認していかなければならないが、例えば超男性的 (hyper-masculine) な平原インディアンでは、意外と母系出自の社会が多く見られる。筆者が資料を点

検したことのあるシャイアン族やクロウ (Crow) 族も母系である。そして、それらの民族誌を見ても特にニューギニアでの「身体的ミソジニー」のような現象は気にならない。しかし、特にクロウ族に妻に対するかなり乱暴な扱いがあるような気がするが、ここでは深入りせず、いづれ近いうちに発表する予定の別稿で論じることにはしたい。

モハーベ族は別だがナバホ族やズニ族のような南西インディアンも、同じように母系であり女性の地位は高い。同じように特に男達はミソジニストとは感じなかった。いづれにも成女儀礼がある。しかし、モハーベでは思春期に鼻中隔から出血させる儀礼が若者にある。先に述べたように、ジャイノフィリア的な意味があると見なすことができる。

これらの諸部族にはみなベルダーシュが制度としてある。と同時に平原インディアンには Woman Chief や Woman Warrior などの女性が男性的な地位に就くことがあることも知られている。同じ平原インディアンの Piegan 族<sup>27</sup>は Manly Hearted Woman といわれる特別な威信 (財産と社会的地位) を有する女性達が知られている。

このように考えると、例えば平原インディアンのように超男性的な文化だから落ちこぼれがベルダーシュになるというのではなく、社会的なあり方としての男女の対立意識の厳しさと関係しているのではないかという思いが浮かぶ。ギルモアの言うように「男性の病」である以上、これらの、たとえ母系の集団であっても、何らかの形のミソジニーは存在すると想定すべきだろう。もう一度その目で民族誌を読み直す必要がある。しかし、ミソジニーが存在すれば、同じくギルモアの指摘に従え

ば、何らかのジャイノフィリアも存在していなければならぬ。それが、どのような形で表現されているかが、今回の回りくどい考察で得た、筆者の関心なのである。

既に議論の理路は明らかかと思うが、社会のレベルで男女の対立の厳しくないところ（社会的に男女が異質なカテゴリーとされることはないようなところ）、個人のレベルで性の分離のこちら側からあちら側に（何らかの形で）移ることが大きな抵抗を生み出すわけではないようなところとして、北アメリカ先住民の社会を考えることができないのではないか。そして、だからこそ女性羨望を個人のレベルで表現する人が出てきて、ベルダーシユとして社会的に位置づけられるのではないか、というのが筆者の抱いた仮説なのである。つまり社会的素地があって初めて個人の特性が意味を持つのである。

当然これからの課題は、様々な資料分析からこの仮説を検定することだが、これまで行ってきた部族毎の宇宙観の中での位置づけを探るのと共に、取り組んでいきたい。

## 謝辞

本稿は平成二十三年度跡見学園特別研究助成費による研究成果の一部である。記して交付して下された当局に感謝申し上げます。なお本稿脱稿時は当該研究年度内であり、研究遂行中の制作である。他の成果については今後紀要などで逐次発表させていただく予定である。

## 参考文献

- Anonymous, n.d., *Transgender Identities, including: Drag Queen, Drag King, Genderqueer, Hijra (South India), Khamti, Fakaleiti, Trans Man, Uranian, Bigender, Andromimtophilia, Mahu (person), Bacha Bazi, Fa'afafine, Gynometophilia, Mukhanathum, We'ua, Muxe, Bissu, Hephaestus Books*
- アードナー、エモウイン他 1987 『男が文化で、女が自然か』 晶文社
- バレット、D. 1999 『妊娠した男』 朝日新聞社
- ベッセルハイム、B. 1971 『性の象徴的傷痕』 せりか書房
- Bickford, John H., Jr., 2003, *A Pragmatic Definition and Measure of Sexual Orientation for Social Science Research*, UMI (Ph.D. Dissertation at University of Massachusetts Amherst)
- Brown, L. B. (ed.), 1997, *Two Spirit People: American Indian Lesbian woman and Gay Men*, Harrington Park Press.
- Devereux, George, 1937, "Institutionalized Homosexuality of the Mohave Indians". *Human Biology*. 9:498-527
- Dundes, A., 1962, "Earth-diver: creation of the mythopoetic male," *American anthropologist*. 64:1032-51
- Herd, W. (ed.), 1996, *Third Sex, Third Gender, Zone Books*.
- 藤崎康彦 2007 「ナバホ創世神話の中のナドレー宇宙観とジェンダー研究序説——」 『跡見学園女子大学文学部紀要 第40号』
- 2009a 「モハーベのアリハ（ベルダーシユ）——その社会的／ジェンダー的地位の考察——」 『跡見学園女子大学文学部紀要 第42号(2)』
- 2009b 「ベルダーシユの本質再考——モハーベ族のアリハなどの考察を通して——」 『跡見学園女子大学文学部紀要 第43号』
- 2009c 「男が男を生む——イニシエーションとジェンターの研究」 『跡見学園女子大学 人文学フォーラム』 第7号

2011a 「平原インディアン」のベルダーシュの一考察」『跡見学園女子

大学文学部紀要 第46号』

2011b 「アメリカ先住民シャイアン族の成熟儀礼」『跡見学園女子大学

人文学フォーラム』第9号

蒲生正男 1978 「産屋・他屋の文化とその主体的条件」『増訂・日本人の生活構造

序説』ペリカン社所収

Gilmore, D. D., 2001, *Misogyny: The Male Malady*, University of Pennsylvania Press

Hopkin, I., 1970, *The Island of Menstruating Men*, Chandler Publishing Company

Jackson, J.E., 1996, "Coping with the dilemmas of affinity and female sexuality:

male rebirth in the central north-west Amazon," in Shapiro et al.

Jacobs, S. et al. (eds.), 1997, *Two-Spirit People*, University of Illinois Press.

三橋順子 2008 『女装と日本人』講談社現代新書

Shapiro, Warren and Uli Linke, 1996, *Denying Biology*, University Press of America

ザッペーリ, R. 1995 『妊娠した男—男・女・権力』青山社

## 注

- 1 以前の拙稿(2009a, 2009b)では「デヴルー」と表記していた。フランス語読みではこうなるし、実際ザッペーリの『妊娠した男』へのジャック・ルゴフの序文の翻訳では訳者は「ジョージ・デヴルー」と表記している(ザッペーリ 1995:15)。また、三省堂刊の『固有名詞発音辞典』でもカタカナで表記すれば「デヴァルー」に近い発音記号表記がなされている。しかし、その後あるハリウッド映画を見ていた際「デヴロウ」と聞こえる発音をしていた。英語ではそうなるのであろう。参考文献の著者は明らかにフランス系の名の人であり、英独仏三カ国語は確実に使いこなしている人だが、アメリカで研究し、英語で発表された論文を筆者は扱っているので、ここではアメリカ式に「デヴロウ」と改

めた。

- 2 Jacksonの論文は興味深い例を扱っているが、十分に本文で議論する余裕がなかった。また、拙稿2009cは日本の民俗儀礼に同じ問題意識が読み取れるのではないかと思える事例を扱っている。少なくとも「村人」は男たちが生み出すのであると考えられる。

- 3 参考文献の Anonymous, n.d.にある。この本は資料として使うには問題のあるものであることは承知している。これは Wikipedia などの website の記事を特定のテーマ(この場合は、長たらしい表題に現れているように、色々な文化の性的少数者など)で編集したものである。最新の記述をサイトで確かめてはおいたが、本文で記したようにあくまで参考程度の扱いに止めておいてある。

